

第2章 Summer Project (サマープロジェクト)

Summer Project は、「3年生のリーダーシップのもと、異学年協働による、学校祭成功に向けたプロジェクト」ということで、特別活動に力点を置いた取組を行っている。昨年度と同様に学年プロジェクトが通年での実施となったことから、Summer Project は学年プロジェクトと並行する形で、学校祭に注力して行われることとなった。また、今年度も企画の段階から生徒主体で取り組んだ。どういった目的で、どのような部門をいくつ作り、当日までの準備のスケジュールから、当日のタイムテーブルまで、ゼロから創り上げた。コロナウイルスの影響で制限があった部分も多かったが、昨年度の全校合唱と同様に、『コロナだからできない』ではなく、『どのようにすればできるか』という視点で活動することができた。

今年度は、学校祭に絡めた活動を各委員会で行う(例えば、学校祭看板の制作を昨年度は執行部が行ったが、今年度は学校環境委員会が行った)ということと、第3学年の学年プロジェクトと関連付けて行った。特に、第3学年の学年プロジェクトでは、テーマの1つである「核」について、まずは「学校の核」になるということで、総合的な学習の時間や道徳と絡めながら活動を構成していった。19人という少人数ゆえに全ての生徒が何らかのリーダーをこなし、委員会と学校祭の活動を並行して行わなければならない状況であった。「特定のリーダー」ではなく「最高学年の集団」として責任を果たさなければならないことから、互いに相談し、共通理解を図る場を設けたり、個々が反省すべき内容を全体で共有し、次につなげたりできるように留意した。

1 昨年度の Summer Project とのつながり

昨年度の学校祭では、生徒にとっても教員にとっても「目的・目標を明確にすること」が大きな学びとして残った。世代交代があっても、この学びを受け継ぎつつ、「前例にとられない」、「自分達らしい」活動を創り上げることを生徒会の柱とした。前年度後期の生徒会では、既存の委員会の枠はそのままに、柔軟に活動を構成しようとしたがうまくいかなかった。そこで、固定観念にとられない活動にするために生徒会規約を改正し、委員会の形を改めることとなった。(以下はある生徒の卒業レポートの一部である)

しかしそれは、簡単なことではなかった。なぜなら、前例がないからだ。前例にとられたくなくて、新しい委員会を作ったのに、前例がないから、新しい委員会は何を目標に、何をすればいいのかわからなかった。私たちはそうならないように、春休み中に何度も集まって一生懸命に考えたつもりだった。…(中略)…これは、私たちの説明不足が原因だ。自由を求めすぎた私たちは、緩すぎる説明では、伝わらないということを学んだ。それから私たちは、目的・目標の大切さを改めて実感した。

2 目的を定める

前期の生徒会全体のスローガンは『百花繚乱』であり、1人1人の個性が咲き誇って欲しいという思いがあった。例年、生徒会スローガンと学校祭テーマは別のもので、学校祭テーマの方が印象に残るということもあり、学校祭テーマを生徒会スローガンの大きな枠組みの中の1つと捉えたいと生徒達は考えた。その結果、ハウセンカをモチーフとすることとなった。ハウセンカには花が咲き誇った後、種子を遠くに飛ばす性質から、学校祭がその後の

学校の発展に繋がってほしいという思いを込めた。また、一瞬一瞬を大切にしながらも、思い出や絆がずっと残ってほしいことから、「閃」の漢字を用い、サブテーマを「永遠に咲き誇れ！」とし、学校祭テーマは『鳳閃花～永遠に咲き誇れ！～』となった。

『個性』という軸をもとに、部門が決定し、各々が企画へと移った。昨年度と大きく異なったのは、部門ごと委員会ごとに校長ヒアリングが行われたことだ。生徒達は、自分の言葉で責任を持って企画を語る事ができた。



3 目的・目標を達成するために

今年度は、昨年度以上に新型コロナウイルスの影響で計画通りに物事が進まなかった。ということもあり、必然的に先を見通して複数案持つ、計画を見直す、方向転換をするといったことが行われた。上手くいくことばかりではなかったが、生徒達の中に学びとして残っている。(以下は何人かの生徒の卒業レポートの一部である)

・「これが終わったら、これをする」程度の簡単な計画では、コロナ禍の世の中では急に穴が空くことも多いことから、予測していくつかの案を持っておくような計画性がないとうまくいかないということです。具体的には、コロナで集まることができなくなったり、一人に任せていた作業がその子がいなくて計画通りに進まなかったりするなど、大変な思いをしました。

・他学年同士でグループを組んで撮影する予定でしたが、コロナの関係で学校に集まることができなくなりました。そこで僕は同学年で撮影するという方法で撮影をしました。そこから自分は臨機応変に対応するという事を学びました。

・文化祭を通して学んだのは広く深い計画が大事だということです。広いというのは、コロナの世の中だから班で分けたり、時間の管理だったりと多くのことを考えないといけないという意味です。…(中略)…深いというのは、早く問題が解決終わったらどうするかなど参加者1人1人について考えるという意味です。

3 成果と課題

成果としては、昨年度からの学びがつながり、深まったということである。昨年度の学び「目的・目標を明確にする」から始まり、前例踏襲でない活動をしていくがゆえの「確固たる目的・目標の大切さ」、不安定な世の中で計画通りにいかないことから「目的・目標に立ち返りながら修正していく力が必要」というように、学びがつながり「目的・目標」に関する見方が多面的になってきたと考える。

課題としては、教師側のスタンス・目的・方法等の共有である。これは昨年度にも挙げたことだが、生徒が変われば方法も変わるため、誰がどのようなスタンスで生徒と関わり、共に創る活動にしていくかの共通理解が必要だということである。この課題意識を持って今年度活動したが、まだまだ考えるべきことが多かった。昨年度とはまた違った取組もあったこと、教師集団の構成員が変わったことなどがあり、もっとじっくり語り合う場が必要であると痛感した。積み上げていくものと、新たに挑戦すること、これらのバランスもまた共通

認識が必要だと感じる。これは、先に挙げた生徒達の学びとリンクする部分もあるが、前例がないからこそ少しの言葉や資料だけではその思いは伝わらないということである。生徒と共に創るからこそ、失敗や悩みもあるが、挑戦するからこそ新たな段階に踏み出すことができる。ただし、生徒が主役の活動だからこそ、生徒の何倍も考え、先を見通すことが肝要であると深く心に刻んで、これからも生徒と『共に創る』を追求していきたいと思う。

(文責 竹内 恭平)